れに反して、中国では諺の中に〝医は仁術〟というものは存していない。ここに、その解釈の相違および重要性の大きな違いが存しているものと解される。

中国において、なぜ、医者以外のもの、とりわけ、官僚・文化人たちが、〝医は仁術〟を称したのであろうか。さらに、古くから存していたものの、なぜ、明代において盛んに称されるようになったのであろうか。

その理由として考えられるのは、明代に至るまでの時代的変遷のことである。すなわち、唐・宋間の大きな変革期を経た政治・社会の変化、そして、経学・文化等の変化である。それに伴っての儒家・文化人たちおよび医者の身分の変遷のあったことである。

（横浜市立大学医史学研究室）

素問霊枢に於ける気の研究

家本誠一

素問霊枢の医学は、三才・陰陽・五行をもってその理論的枠組となし、気をもってその医学的内容を展開している。気とは一つの機能的エネルギー的概念である。この点、現代医学がより多く形態的物質的基礎の上に構築されているのに対して一つの特色をなしている。故に中国古代医学は気の医学と呼ぶにふさわしい。

中国古代における気の本義、気の概念の発生と展開の探究については、先人の業績がある。その検討はしばらくおいて、ここには素問霊枢の医学における気の意義について考える。

生体の構成。これは三つのレベルに分けてみることができる。一つは魂魄。語源によれば、人が死ぬと魂は肉体から抜け出て飛昇し、あとにぬけがらとしての肉体の形が残る。これが魄である。逆算して生体は魂魄より成る。素問

霊枢では、肺は魄の処、肝は魂の居である。天地の気の人に在るものを徳気といい、これより魂魄精神心意志思智慮が生ずる。

即ちいずれも気の一種と考えられる。二は形気精神。形は肉体である。気はこの肉体を動かすもの、機能的なものである。精は形を動かすもと、エネルギーであり、神は気を統合するもの、精神である。これらも気の一形態である。三は陰陽。これは最も原理的なものであり、人の形態も機能も、生理も病理も、陰陽に分類される。形・精・魄という形態的なものは陰に属し、気・神・魂という機能的なものは陽に属する。この陰陽も機能面では気としてとらえられている。

気の生成。生体の維持活動の根原となるものは水穀（食物）である。これを五味と呼ぶ。（五）味は形を生じ、形は気を生じ、気は精を生じ、精は化（生命現象）を生ずる。即ち、気＝生体における機能的なものは五味＝水穀の精気（エネルギー）によって形成される形＝形態的なものから生成する。

気の種々相。自然現象としての気には天地の気、四時陰陽の気がある。それぞれに気候気象の条件や風土の状態を綜合した概念である。生命現象としての生体の気はこの天地陰陽四時の気に感応してその在り方をきめる。また、生理病理の位相に応じて多種多様の姿をとる。

水穀の精は口より入って脾胃三焦の作用を受け、精微の気（営）と濁気（衛）として抽出される。これらはそれぞれ営血衛気（血気営衛）となって経脈に順って四支（陽）蔵府（陰）を環流する。これを陰陽の働きの面からみると、陽気＝衛気は四支・皮毛筋骨において温熱・発汗・栄養・防衛を司り、陰＝営血は精を運んで五蔵に蔵し、必要に応じてこれを放出してその機能を営むのである。また、霊枢邪客篇によれば、五穀は分かれて宗気・営気・衛気となる。中国古代医学において、呼吸生理は最も不備の局面であるが、この宗気の一部は息道に走って呼吸の一班を荷うものとされている。肺は気の本、魄の処なり（素問六節蔵象論）というとき、この気には宗気・呼吸気も含まれよう。しかしながら、五気は鼻に入り心肺に蔵し、視覚・聴覚を司り、鼻の通塞臭覚に関係するとなると、呼吸とは別の話になってしまう。

心身を構成する諸々の要素、蔵器組織にはすべて気がある。蔵府の気としては肝気・腎気・胃気など。経脈には経気。形気精神においても形気・精気・神気という。この気は機能ないし機能を実現するためのエネルギーと考えてよいであろう。

病因と防衛。霊枢邪客篇は気には真気・正気・邪気があるという。真気は穀気より生成され身体を充実するものである。当然疾病罹患に際しては抵抗力・防衛力となる。正気・邪気は共に病因である。正気は侵襲力が弱く真気に勝てない。人を深く傷害するものは邪気であって、これが真気を傷るとき、陰陽は倶に感じ、五蔵乃ち傷れ、百病始めて生ずるのである。

疾病における気。素問挙痛論に「百病気より起る」とある。怒喜悲恐驚という情動により生体の気（神経作用）に動乱を生じ、諸々の神経症状、身体症状が起ってくる。霊枢本神篇にも同様の記述がある。素問・疎五過論と徴四失論には社会的地位の変動（下行）による心身症の記載があり、体重日に減じ気は虚し精を失い時に驚（痙攣）する等の症状をあげている。これも気の病の一つである。

診断における気。素霊の診断法は脈色証の三つである。脈は生気の在り方を反映し、診断予後の重要なより所となる。脈に胃気（生気）あるとき予後佳良、これを失うときは死である。

治療における気。用鍼の類は調気に在りという。陰陽虚実、営衛の気の調和を図るのが治療の目標だというのである。

以上、気は生体の機能、エネルギーに関し、神経・心理・情動・精神に及ぶ理念である。

（横浜市）